記憶を未来につなぐ、減災へのエスノグラフィー

岩崎 信彦 *Written by Nobuhiko Iwasaki*

阪神・淡路大震災の15年目を迎えるにあたって、２００５年の「大震災10年」を思い起こすことから始めよう。「10年ひと昔」というが、たしかに10年は一つの節目であった。私が震災直後から復興支援に参加した鷹取東地区で、ずっとテレビのドキュメントの題材になることを受け入れてこられた家族４人を亡くされたMさん夫婦とご主人を亡くされたTさんが、10年を境にそれを止められた。また、私たちは11年目に震災で障害を負った方々の集いを開いたが、そのよびかけの過程で、講演などされてきたある震災障害者の方が「10年を機に震災から離れふつうの生活者になる」と言われて参加を断られた。

これらの意味するところはおよそ明瞭であろう。震災をもはや過去のものとし、新しく未来を向いて歩んでいこう、ということである。この10年間は、家族の死や自分の震災障害は過去のことではなく、その時々の現在進行形の悲しみであり苦しみであった。しかし、もうそれを過去のものとして位置づけて乗り越えていかなければならない時がきたのだ。それが10年の節目だったのである。

しかし、その節目を区切れない人たちもいた。中学３年生の時に地震でピアノの下敷きになり高次脳機能障害になった女性とその母のKさんである。震災で障害を負っても、行政は「身体障害１級」相当者のみを救済対象とし（阪神・淡路大震災で60名）、あとは一般的な障害者行政にゆだね、被災障害者という困難な事情には何も手を差し伸べなかった。世論も「命があっただけで満足せねば」という風潮があった。Kさんは孤立無援の中で必死に娘を支えて生きていた。震災障害者の集いが始まって４年近く、今は毎月１度、「よろず相談室」で数名の震災障害者が交流を行っている。とくに同じ高次脳機能障害を負った娘さんの家族Oさんたちと出会い語り合う中で、Kさんと娘さんはしだいに元気になり、前に向かって歩みを進めている。震災15年は彼らにとって、一つの区切りの年になるかもしれない。

＊＊＊

私は、10年目には「記憶と風化」のジレンマについて悩んだが、今は次のように考えている。最初から「記憶」があるのではない。まずあるのは、「出来事」とその「体験」「痕（きず）」である。「体験」や「痕」が、ずっとそのまま「現在」として続いていれば、未来へ進んでいくことは難しい。「体験」「痕」を過去のものとして「記憶」の対象にすることができ、そこに「距離」がとれれば、日々の生活の間は過去を忘れ、今の生活と未来のことに集中することができるであろう。そういう意味で忘れることができ、風化を免れないものが「記憶」である。忘れることができ、風化するという「距離」があるからこそ記憶である、と。

それでは、体験や痕を過去のものにし、未来への歩みを踏み出させるきっかけは何であろうか。その一つは「分有された体験の共有化」ではないかと思う。大震災は一つの地震から起

震災モニュメントウオーク〔写真提供：特定非営利活動法人 阪神淡路大震災（1・17希望の灯）〕

きたものであるが、「出来事」は無数にあり、被災者はそれぞれの体験において出来事を「分有」している。被災者の間で本当に話が通じ、心が通い合うことは難しいことなのである。大学生の息子を亡くされたSさんは、震災4年後に始まった「震災モニュメント・ウオーク」に参加したときに、次のように言っている。「これまで自分の息子（の死）のことしか考えることができなかった。こんなに見ず知らずの人たちが、息子たちの死を悼んでくださるなんて。…なにか心が開けてきて、今までに人に話したこともないようなことまでお話しすることができました」（山崎一夫、神戸大学震災研究会編『阪神大震災研究5 大震災を語り継ぐ』、2002）。Kさん親子が初めて震災障害者の方々、とくにOさん親子と出会い、体験を語り合った時も、これに近いものがあったであろう。

『時間はどこで生まれるのか』（橋元淳一郎著、2006）によると、そもそも宇宙には物質の運動があるのみで、時間はない。そこに「生命」と「生きる意思」が生じて初めて時間が生まれるのだという。出来事の体験、とくに辛い体験、痕がただ一人で担われるとき、時間は重く停滞し、意思も鈍くなるだろう。しかし、それが複数の人々、さらに集団によって共有されるとき、時間は生き生きと流れ始め、現在を強く生きていく力が生じてくる。そして、そこに過去から未来への流れ、すなわち歴史が生み出されていくのではないか。阪神・淡路大震災の慰霊の活動は、慰霊祭やモニュメント・ウオークによって、多くの人々に分有された体験が共有化されていき、「希望の灯り」という未来への志向を生んだのである。「はるかのひまわり」の活動もそうである。「意思する主体」から歴史は紡がれるのである。

＊＊＊

それでは、被災の当事者ではない人々に、被災者の体験や記憶はどのように伝えられ、継承されるのか。それをもっとも明確に示してくれるのは「原爆資料館」である。私は、この夏、広島平和記念資料館を訪ねた。被爆者の生きてきた証と被爆死の実情が丁寧に示されている。ボランティアの説明員さんが「『祈りの広島、怒りの長崎』と言われているのです」と資料館の展示の性格について話してくれた。私たちは、原爆の威力を認識し、被爆者の苦痛と無念に共感しながら、原爆体験を「分有」することができる。さらに「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」という共通の祈りが、ここを訪れる人たちの、そして世界の人々の祈りへと広がり、「ヒロシマ、ナガサキ」が多くの人の記憶となっていった。

阪神・淡路大震災では、地域社会で慰霊、まちづくり、語り部、朗読、学校教育・社会教育、各地被災支援などいろいろな形で、体験の分有と共同化、記憶の継承が行われてきた。また「人と防災未来センター」がつくられ、資料展示が行われている。もちろん、原爆と異なって「祈り」「怒り」というコンセプトは前面に出てこない。「癒し」というコンセプトが出されたが、必ずしもセンターのコンセプトになりきれなかったようである。社会災害としての要素も含まれる自然災害のとらえ方の複雑さが表れている。

＊＊＊

ところで減災と防災はどこが違うのであろうか。花村周寛氏は『いのちをまもる智恵』（2007）を編集して次のように言っている。「〝災い〟と〝防ぐ〟との間に横たわる30の風景（ストーリー）…。情報や技術だけで語られる『防

災』の2文字の間に温度のある風景が吹き込まれることで、はじめて〝いのちをまもる智恵〟として未来へ紡がれていくのではないかと僕は信じている」。そして、これが「減災」なのだ、と。

その30の減災エスノグラフィー（人々の暮らし方の採録）については別に論じられているので、私たちの身近に目を向けてみよう。神戸大学の学生ボランティアグループが中心となって開催している「灘チャレンジ」というお祭りがある。1995年の阪神大震災から1か月余りがたった頃、ボランティア「震災救援隊」は「震災以降の私たちの活動の中で出会った多くの住民の人たちと『一緒になにかをしたい』『街づくりというものを考えていきたい』そういう想いから」、6月に八幡神社の境内で「灘チャレンジ」を催したのである。住民フォーラム、JAZZステージ、模擬裁判劇「ともに生きる街を求めて」、フリーマーケットなど多くの催しがあり、協賛企業18、協力団体21であった（パンフレットは8頁）。

その活動は、2009年6月には第15回を数え、56頁にもなるパンフレットは豊かな内容で満たされている。まず「被災地を忘れない」特集が、12頁にわたって「阪神・淡路大震災被災地でのよろず相談室の取り組み」をはじめ中越沖、能登半島、中越地震の被災地支援の取り組みを伝えている。その後には、会場である都賀川公園で2008年7月に起きた大雨による水難事故についての特集「水難事故を忘れない」が11頁続いている。これらを中心に、模擬店など32テント、風刺劇「違ったっていいじゃん！―日本に暮らしている外国にルーツを持つ子どもたち」などのステージ、フリーマーケットなど多彩で楽しい催しが展開したのである。協力企業35、協力団体・個人多数。このように「灘チャレンジ」は灘区民の年中行事になり、地域社会の歴史をつくりながら、阪神・淡路大震災とさまざまな災害の記憶継承、さらに減災活動の提起の場になっている。

「灘チャレンジ2009」の風刺劇より

＊＊＊

彼らの日常的な活動の一つとして中越・KOBE足湯隊がある。「足湯は、被災された方たちにリラックスしてもらい、同時に会話をしながら何気なく出てくるニーズや不安などのつぶやきを拾っていきます。これらのつぶやきを行政や専門家へ橋渡ししていくのです」（第13回灘チャレンジ展示より）。神戸大学、神戸学院大学、神戸市立外国語大学、大阪大学、長岡技術大学など複数の大学の学生が協力して進めている。

この活動をサポートしている被災地NGO協働センターの村井雅清氏は、能登の復興に並々ならぬ思いを抱いている。神戸という都市社会では災害復興を経て、人々がより人間らしく生き、災害に協同で対応していける新しい社会をつくりあげていく道筋が見えにくい。しかし、能登という地方社会には歴史を重ねた文化的資産が豊かな自然とともに残っている。これをベースに人々は協同を再建し、「もう一つの社会」へと前進できるのではないか、と考えるのである。氏の「能登だより」の一部を引用してみよう。

「『熊甲二十日祭』に、神戸から大学生や社会人、栃木・新潟・名古屋から足湯ボランティアなど災害救援ボランティア関係者総勢31名で参加してきました。この祭りは、能登・七尾市

能登での足湯隊の活動

能登「お熊甲祭」への支援活動

中島町（旧熊木郷）で催されている『寄り合い祭り』で、毎年、収穫を喜び、豊作を神に感謝し、9月20日に行われます。今年は19末社のうち17社から旗枠が出され、やはり少子高齢化の影響がもろに出て、神輿の担ぎ手が揃わず不参加を決めた集落も二つとなりました。そもそも今回の私たちの参加も、この現象を少しでも止める役割をできないだろうかと祭りの応援をしようと1年前から計画していたものです」

村井氏たちは、お祭りだけではなく、被災した商店街の活性化や寺院の復興などにかかわって地元の支援を行っている。「私たちはこの経験をもとに、もう一つの復興支援のあり方を探りたい」と考えているのである。「もう一つのあり方」とは、恵みと災害をともにもたらす自然を深々と受け止めながら、人々がそれぞれの仕事と生活を営み、地域社会の出来事に協同で取り組み、ともに歴史を紡いでいくようなあり方であろうか。

＊＊＊

このような都市と地方の連携・協同という視点から新しい活動を生み出したのが、東京の早稲田商店会の「震災疎開パッケージ」（2004年スタート）である。各地の商店街が住民によびかけて会費を払ってもらい、震災があったときには延べ30日間地方の疎開先に避難できるという仕組みである。震災がなかった年は、疎開先の名産品が送られてくる。疎開先下見ツアーも企画されている。

大都市と地方では時間の流れる速さが違う。自然に深く抱かれた生活は時がゆっくり流れ、利潤蓄積と競争の「資本活動」が盛んな大都市は時間が速く流れていく。そして、現代社会は、時がゆっくり流れる地方を取り残し衰退させていく。忙しさに追われる大都市は人間が自然から切り離されリズムを失い疲弊していく。このマイナス循環をプラスに転換しようというのが、疎開パッケージであり、能登足湯隊の支援活動であるのだ。

そういえば、渥美公秀監修『地震イツモノート』（2007）も時間の流れを意識した、「防災といわない防災」のマニュアルである。「モシモ」起こったらという時間の流れを途切らせた防災ではなく、「イツモ」生活の中で心がけられる防災・減災の知恵が、167人の被災者の体験を踏まえて盛り込まれているのである。CEL

◎岩崎 信彦（いわさき・のぶひこ）
神戸大学名誉教授。1944年福岡生まれ。66年京都大学文学部社会学科卒業、京都大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程修了。神戸大学助教授を経て、教授。その後、大学院文化学研究科長も務める。阪神・淡路大震災直後から神戸大学震災研究会のとりまとめ役として被災地復興支援と震災研究に取り組む。主な著書は、『阪神・淡路大震災の社会学〈1〜3〉』（共著、昭和堂）、『災害と共に生きる文化と教育』（共著、昭和堂）、『都市論のフロンティア』（共著、有斐閣）、『町内会の研究』（共著、御茶の水書房）など。